
鬼姫奇談

界軌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼姫奇談

【Nコード】

N89950

【作者名】

界軌

【あらすじ】

平安の世、京の都の寂れた屋敷に住む姫、月帆。特異な容貌を持つ彼女はひっそりと忘れられたように暮らしていた。

ある春の夜、彼女の住む屋敷に都を騒がせる盗賊団『陽炎』が押し入る。盗賊団の頭”空蝉”との出会いで月帆の運命が動き出す……。

本編は完結しています。番外編をスロウペースで投稿中です。

序章（前書き）

初投稿になります。

少しでも魅力のある作品になるよう、努力したいと思います。
宜しく願います。

注意：時代考証などはかなりいい加減です。

話の都合上誤魔化している部分も多いので、平安時代に詳しい方には

納得のいかない箇所が多々あると思います

ご了承ください。礼。

序章

鬼がおりまする

鬼がおりまする

…… 血が流れ、鬼が集うのか

…… 鬼が集い、血が流れるのか

平安の世。帝のおわす京の都は四匹の聖獣によって守られていた。

そんな都の鬼門にほど近い荒れ果てた地に、寂れた屋敷があつた。ごんまりとして新しくはない。しかし作られた当初の財を注ぎ込んで作られた美しさをそこかしこに残していた。

屋敷の崩れかけた築地の奥、荒れた庭に面した簀の子に座り、勾欄らんに寄りかかるようにした一人の姫がいた。長い黒髪を風に揺らし、春に似つかわしい桜色の単ひとえを纏まとっていた。

十五、六といった年頃の姫の座る簀の子には山桜が花びらを散らしていた。

「姫様？お部屋においでですか？」

年配の女の声がした。姫の乳母だ。

「静、私はここよ」

小さいながら、涼やかな美しい声が響く。

「……そちらにおいででしたか」

室の奥から芥子色の単を纏った四十ほどの女が現れた。その視線は姫より僅かに外されていた。

「なにか？」

「お風邪を召されます。それに、明日は左近の少将様がいらっしやるとお父上様から文が来ていましたでしょう」

「……そうね」

言葉少なに姫はその場に立ち上がった。微かな衣擦れの音と共に彼女は視線を上げた。

「ひっ……………」

静は引きつったような悲鳴を漏らし、姫から顔を背けた。口の中で呟くように「申し訳ありません……………」と言ったが、姫は気にする様子も見せず部屋の中へと足を進めた。

いつものことだわ……………。

そう思うほか無かった。

静が姫の元を訪れる少し前、京の都で悪評を高めていた盗賊団『空蝉』が都の賑わいからはずれたこの屋敷を見つけ、今宵の獲物と

することを定めていた。

「ッ」

絹を切り裂くような悲鳴が響いた。室内へ入ろうと御簾を潜るために腰を屈めた姫も、その御簾を押さえていた静も動きを止めた。

「何？」

呟いて、姫は再び簀の子に戻った。その傍らでは口元を押さえ静が顔を青くしていた。

「ああ、ああ……。賊ですね。に、逃げなくては」

静は佇む姫に目もくれずその脇をすり抜けて廊下の先に早足で進んでいった。角を曲がったところで、ぴたつとその動きを止めた。姫は、静の背から生えた白銀に輝く刃を見た。

その男は、乳母の体を抱くようにして現れた。

「お、……………お、に」

静が震える声を発して、床にくず折れる。

身を守る術など知らぬ少女は、ただ目を見開いてその様を見つめていた。

男は静の背を貫いた刃を引き抜き、振るい、血飛沫を辺りに散らした。刃を持つのは太くもなく細くもない、しかししっかりと筋肉のついた逞しい腕。全身に纏うのは放免の衣装を着崩したような着物は、表が朽葉色で裏が黄色の山吹。腕から肩、肩から首、首から顔へと視線をずらすと、正に男もその視線をこちらに向け、姫を凝視していた。

雲が月を隠し、濃い闇の中で、二人は互いを視ていた。そうして、風が流れ、雲が流れ、月の光が庭から簀の子へと差し込んできた。

賊の男は、何とも不思議な心地だった。たおやかな少女が目の前に、叫ぶことも泣くこともせず、只立っているのだ。屋敷の中で見た誰より美しく精緻な細工の衣装を身に纏う小柄な娘だ。今し方殺したのは、年頃から言って自分の乳母だろくに、少女は、顔こそ見えないが、気配から察するにこちらをただ視ているのだ。怯えるでもなく。

月の明かりが二人の足下を駆け上がる。瞬く間に胸元から首元を照らし出す。幼さの残る口元、通った鼻筋、そして……

「
紅」

男は、背筋に雷が走ったような衝撃を受けた。少女の小さな顔の二つの瞳は深紅の輝きを放っていたのだ。信心深いものならば、恐れるか、憎しみを向けて排除しようとするだろう紅い、深く紅い、流れる血の色だ。

姫は、賊の低い囁きに僅かに体を震わせた。

このものは、わたくしを物の怪、妖怪、あやかし、そう呼ぶ

のだろうか。屋敷の者たちのように恐れるのだろうか。父様のよう
に憎むのだろうか。それとも、……………。

賊は少女の瞳に怯えを初めて見て取った。しかし、それが自分へ
のものでは無いとすぐに気が付いた。

決断は早かった。

立ちつくす少女に手を伸ばす。真っ直ぐに。

「俺と共に、来い」

大きな赤い瞳が瞬く。それから、姫は眉根を寄せて困惑を現した。
じれったくなくなった男は伸ばしたその手で姫を胸に引き寄せた。腕の
中で見上げてくる深紅の瞳に問う。

「お前、名前は？」

「……………月帆」

桜色の唇から海風の香りがするような名が紡がれた。

男は、拒絶するでもしがみつくでもなく胸に添えられた小さな手
の熱を、少女は体に回された腕の熱を、熱い、と感じていた。

男が月帆を抱き上げてその場を立ち去る瞬間、月帆は倒れ伏した
静を見つめて、唇から呟きが零れた。

「鬼は私では無かったの、静……………？」

序章（後書き）

序章 貳 く不穩の足音

「月帆が攫われた?!」

勘気も露わに、時の左大臣は薄暗い室内で叫んだ。

「あれは、左近の少将と娶めあわせる予定だったのだぞ。いくら、あんなものを娶めとりたいという変わり者の男でも、攫われた娘では……、台無しではないかつ」

傍らに控えるのは存在感も希薄な黒装束の男だった。左の大臣おとこの相談役であり、片腕であり、闇の事柄を請け負う者で、その名を岐道どうと言った。

「左大臣様」

「一体全体、私にどうしろと言っただい！」

囁くような声は左大臣の怒気を帯びた声にかき消される。

けれど、陰陽寮を追放された外道使いは言葉を続ける。

「月帆姫の一件、左近の少将殿のお耳にも入ったご様子。直ちに使いの者か、少将殿自らがこちらに向かわれるでしょう」

「何だと!?!」

目を向く左大臣に岐道は言い募る。

「彼の方のご性格では、御自身で助け出したいと言われるかと……」
不可解、といった表情の後、左大臣はその皺の浮いた顔に嘲りさえ浮かべた。そして、簡略を巡らす為に室内を動き回る。

「はっ、世間知らずな小僧め！こちらの都合の良いように動いてくれるわ」

「……では、お許しになるのですか？」

「無論だ。我が配下も同行させれば、私の父親としての面目も立つだろう。」

己の窮地さえも好機に返る。左大臣はそうして内裏での地位を盤石のものとしてきたのだ。ほんの二年前に務めたした左近の少将など赤子のような存在であった。しかし、家柄もさることながら、たった二年で少将まで上り詰めた彼の者の實力は本物であり、将来を期待される逸材でもあった。逃すには大きすぎる魚。

樂しげに笑い、

「お前も行くが良い」

最後に付け足した台詞には不穏な空気が充満していた。

その意を深く理解した岐道は、額を床に着けるほど深く下げた。

「畏まりました、ごいませす」

壹 咲花の約束

洛北からはずれ、さらに北。都から少しばかり離れたところに小さなあばら屋があった。あばら屋とは言え、庶民が住むものよりもよほど状態の良い佇まいだ。藁の飛び出た漆喰の壁。その脇から飛び出た竹筒から絶え間なく煙が流れ出し、人の住むことを示していた。

穏やかなたたずまいを他所に、中から悲鳴に似た声が漏れる。

「あつあつ、姫様、そんなことあんたがするような事じゃないよ！頼むから俺にやらせてくれよ」

簡素とはいえ質の良い着物を纏った月帆が厨やしろ（台所）に立ち、包丁を見よう見まねで持っているのだが、あくまで見よう見まね。刃を持ちそうになったり、ようやく柄を持ったかと思えば、今は只でさえ白い指が青ざめそうなほど強く握りしめている。

「頼む。頼むから、その包丁を離してくれ。ていうか、そのまま離すな！落ちるから、とりあえずまな板に置いて、手を離そう！な！」

けれど月帆は従うどころか、まな板に向き合う。見よう見まねだ。先程から月帆に触らないようにしつつも必死で彼女の行動を止めようとする少年、シギはいつもこうやっている、まな板に包丁を振り下ろす。

「うわあああああああああああああああー！」

絶望を含んだ声でシギが叫ぶ。

つい七日ほど前まで厨を見たこともなかった深窓の姫君に一体何ができようか。手に握りしめた包丁で怪我をするのが容易く予想できたシギは血の気が引いていた。

包丁の重量に振り回されてまな板に叩き付けられようとした月帆の細腕は、浅黒く日焼けした手に掴まれた。

「恐ろしいな。何を料理する気だ？」

その声は言葉通りの恐怖など微塵も感じさせず、むしろ笑いを漏れさせていた。

「お、お頭！」

そして、シギの歓喜の声が彼を呼んだ。

「シギ、俺はこんな事は頼んでいないぞ」

その一言でシギの喜びは吹き飛んだ。

「も、申し訳ありま、せん………………。俺が至らないばかり、に」

微かに体を震わせてシギは頭を垂れる。盗賊団「陽炎」の頭、空^{せみ}蝉は失敗を犯した者を許さない。いざとなれば腹心さえ表情変えずに切り捨てる冷酷さは、傍らにいることの多かったシギにはよくわかってる。

その為、シギは謝罪をしてもし足りない状況だと感じていた。どんな処分も甘んじて受けよう、とまだ十四歳の少年は、悲愴な覚悟

を決めようとしていた。それを遮ったのは、涼やかな声だった。

「シギは悪くありませんよ。私がやってみただけですもの」

空蝉が現れる以前から殆ど口をきいていなかった月帆が口を開いたのだ。

「姫様……………」

シギをかばうような発言にシギ本人が目を瞬かせる。

「それから、腕を放してください。だるくてなりません」

自然な流れのように、空蝉に掴まれたまま血の気の引いていく腕への不満を口にした。その命じるような口調に、シギの顔から血の気が引いていた。

シギは空蝉が機嫌を損ねるのでは無いかと恐れたが、彼のように反して空蝉が発したのは明るい声だった。

「ならば、その手の力を抜け」

言われた通りに月帆は包丁を握りしめた手から力を抜く。解放された包丁は当然地に落ちるが、すかさず空蝉が攫うように空いた手でつかみ取る。そのまま板へ放ると、鈍い音をたてて突き刺さった。

月帆の腕を放すや彼女を横抱きにして男は土間から上がる。

静かに月帆を板間に下ろすと、その前に片膝をついて座った。

「シギの飯は不味いか？」

月帆は首を振る。

「じゃあ、何か不自由はあるか？」

再び首を振る。

「そうか」

今度は肯定を示すためにゆっくりと首を縦に振った。

あの寂しげ屋敷から月帆が攫われてから九日が過ぎていた。攫ったのは盗賊団『陽炎』の頭領、今目の前に座す空蝉という男だった。空蝉は盗賊団の根城に戻ると、成果を分配し始めた部下たちに自分は腕に抱える娘をもらうと宣言しただけですぐさま月帆をこの家に連れて来た。世話をシギに任せ、それから気が向いた時に、ぽつりぽつりと足を運んできていた。少し話をして、時折食事を共にとり、それだけだ。それだけの繰り返し。

自分の聞きたいことを月帆に尋ね、月帆が答えるといつも同じ笑みを見せる。満足気に歪む口と強い意志を持った黒い瞳。他者と間近で接することの少なかつた月帆にとって胸の奥をざわざわと擦る様な奇妙な感覚を与える笑みだった。

この笑みが浮かんだ後はいつも月帆が質問を始める。

「あなた、一体誰？」

「空蝉だ」

「違うわ」

「なぜ？」

「……………」

「……答えられないなら、何故いつも同じ質問をする？」

「……………」

やはり月帆は答えられなかった。

口にしてもいいのものが、いつも迷うのだ。

そうしているうちにいつも空蝉の誤魔化しにあつのだ。

しかし、今日はいつもと違った。

空蝉は言ったのだ。

「宵には夕顔、昼はそうだな、薔薇そらびの花が見られるようになったら教えてやるよ」と。

首を傾げて戸惑う月帆の頭をそっと撫でると苦笑いを零しながら空蝉は立ち上がった。

「では、おれはもういくぞ」

踵を返し、一人厨に立つシギの脇を抜ける。

「苦勞をかけるな」

少年を労う事を忘れたことは無かった。

馬の蹄の音が聞こえ、空蝉が完全に立ち去ったのを知ると月帆も立ち上がり外へ出た。

お気に入りの藤棚の下にしゃがみ込み呟く。

「宵に夕顔で、昼は薔薇………………。夏のこと？」

夕顔も薔薇も夏の花。夏までここに居ると言うの？ここに居ていいの？あの人はどうして私だけ攫ったの？瞳が珍しいから？……………そういえば、静に聞いたことがある。盗賊は攫った女人を売り飛ばすって。では、わたしも売られてしまうのかしら？それならどうしてすぐに売り払わないのかしら？……………そういえば、売られたらどうなるかまで聞いていなかったわ……………。違う。今考えるのはそういうことではなくって……………。

「ぶっつ」

考えれば考えるほど深みに嵌っていった。

この環境は悪くないし、何故か誰も自分の瞳に怯えない。

屋敷にいた人たちや、父親のことが気にならないわけではないが、結局のところ、

結局のところ、わたしが一番気になっているのは、あの人、
……空蝉が貴族だということね。

貳 少将の憂い

時の権力者である左大臣の隠された一人娘が賊に攫われて早三日。

彼の姫の婚約者であった少将は寝る間も惜しんで捜索に当たっていた。もちろん宮廷での公務もあるため、昼夜を問わずに行動できないのは悩みの種であった。

しかし幸いにも姫君の父親である左大臣からは多大な力添えを得ることが出来、捜索ははかどっていた。直に姫君の居場所を掴んだ配下のものが戻ってくるだろう、そう考えていた。

春の麗らかな午後、宮廷での勤務中、左大臣の使いである岐道に呼ばれ、左大臣の執務室へと向かった。

声を掛けると、応じる声が聞こえたので、御簾を上げ、中に入った。

「左大臣様、姫君が見つかったのでしょうか？」

期待を含ませそう言うと、左大臣は悲しげな微笑を湛え、初老の顔を傾けた。

「まだなのだよ、少将殿。この岐道に風潰しに当たらせているが何分京は広く、ならず者どもの巢窟は外れまで広がっている。………姫を攫ったのは盗賊団『陽炎』の一味だと言うのはわかっているのだが、そのアジトとなるとなかなか見つからない」

「心中お察しいたします」

痛ましげに少将がかしこまる。

眉根を寄せた左大臣はふと思いつたように話し始めた。

「そういえば、少将殿は病死なされた兄君の後を継いでそのお役目を戴いたとか」

すると、目に見えて少将の様子が一変した。

顔が明らかに強張り、強い緊張感が全身を包んでいた。

「しかし、きつと兄君は貴方ほど熱心に姫を捜そうとはなさらなかったでしょうな」

そう、笑顔で言うと、少将の緊張は緩み、顔の強張りも引いていった。

駄目押しのように頭（じゆうく）を垂れて左大臣は言った。

「もう少し、我が姫の為に頑張っては頂けないだろうか少将殿。この通りだ」

今、誰よりも権勢を誇る左大臣に頭を下げられ、少将は困惑した。

「頭をお上げください、左大臣様。姫君は将来我が北の方（正室）となられる方。その方の捜索に、右腕と目される方のお力までお貸しいただいているのです。感謝こそすれそのようなこととして頂くなど……………」

恐れ多いです。その言葉を飲み込んだ。

「……………忙しい中呼びたててすまなかつた。何かあればすぐにお知らせくだされ」

頭を上げた左大臣にそう言われ、少将は一礼して執務室から退いた。

しばらくして背後に進み出た岐道が左大臣に囁く。

「裏の情報が入りました。四日後、『陽炎』の一味が下京区の屋敷を襲うそうです」

「陰陽寮の占か？」

「いえ、放免どもが酒場で吹聴しているのを聞いたそうです」

「……………始末はしたのか？」

「放免も、そやつにその話をした男を捜させた後。男からも話を聞き裏をとってあります」

「そうか……………。『陽炎』いや、その頭領は空蝉といったな。なんとも切れる男か。この三日間、裏の者どもになんの情報も与えぬとは。犯行の後に空蝉を尾行することは可能か？」

「無理です。噂以上の男と見ました。ただし、部下共は所詮ならず者」

「はっそれもそうだな。まあ、その後はせいぜい少将殿に役に立つ

てもらおうとするか」

左大臣の嘲笑が室内に響いた。

参 血の赤と瞳の紅（前書き）

一応今回残酷描写あります。
ご注意ください。

参 血の赤と瞳の紅

京のはずれのこじんまりとした家。

出入り口の近くの藤棚はすっかり花を散らしていた。

日に日に強くなる暑さは赤い陽が西に傾く頃にはすっかりなりを潜めていた。

月帆はその日、表にある夕顔の蔓を見つめていた。

春の終わりに月帆が攫われてから既に十五日が過ぎていた。

「姫様、そろそろ夕餉だよ」

戸口に寄りかかってシギが声を掛ける。

なかなか蕾をつけない蔓にしびれを切らしかけていた月帆はすぐに立ち上がり家の中に戻った。

それを物陰から伺う者たちがいた。

月帆の婚約者である少将だ。その脇には左大臣の右腕といわれている岐道も控えていた。

やがて岐道が口を開く。

「少将様、そろそろ姫様を救出された方がよいのでは」

岐道の方を振り向き少将は首を縦に振った。

「ああ。岐道どの。どうやら賊は一人の様子。姫君をお助けするならば今がよい時だ」

さらに後ろに控える者達に声を潜めて指示を出す。

「姫君には傷一つつけぬよう、心して行け。よいな」

控えた数人の黒装束の男達は了解の意を表した。

食事が終わり、シギが月帆の為に入れたお茶を持って戸口に背を向けた瞬間だった。

一気に木戸が蹴破られ、ほとんど同時にシギが倒れこんだ。

月帆はすぐさま駆け寄り、シギを抱き留めた。少年の背中に伸ばした手にぬるり、と嫌な感触がした。

シギの体は小柄な割に重く、支えきれなかった月帆の体は後ろに傾ぐ。

しかし月帆の背中では床を打つことなく、誰かに支えられた。

飛び込んできた男たちはシギを月帆から引き離し、土間に投げ捨てた。

月帆は自分が発している声がよく聞こえなかった。とにかく、シ

ギの名前を呼んでいた気がした。

四 夜の眩き

「おお、月帆。無事でよかった。まことに心配したのだぞ」

大仰に両手を広げ、少将の屋敷を訪れた左大臣が月帆を抱き締め
た。

月帆は人形のように固まったまま何の反応も示さなかった。

少将が遠慮がちに御簾の外で口を挟んだ。

「左大臣様、恐れながら姫君は目の前で賊を切ってしまった為に強
く衝撃を受けられたようで、その……………」

そこからは言葉を濁す。

「月帆は気違いになったと?」

「いえ、そのようなことは決して。医師によれば一時的なものだと
言うことです」

「……………そうか。すまないが少将殿、少し席をお外し願えないか?」

少将は今気づいた様に顔を上げる。

「申し訳ありません。親子の積もる話もあるでしょう。では、失礼
致します」

室の外へ出ると、衣擦れの音ともに立ち去っていった。

少将の気配が周囲から消えると、左大臣の様子は豹変した。

月帆からかなり距離をとり、彼女を見下ろすように立ち上がった。

「あの賊の元で面白おかしく暮らしていたようだな」

氷のように詰めたい声だった。侮蔑と嘲りを含む声だった。

月帆の肩がほんの少し、揺れた。

「岐道の報告によると空蝉とは何もなかったようだしな。これでお前は晴れて少将の妻となれる訳だ。まったく、氣違いになど間違つてもなるな。お前の利用価値はこれしかないのだからな」

そこまで一気に言うつと月帆の顎を持ち上げ、しげしげと顔を眺めてきた。

月帆は瞳を伏せ、父とは極力目が合わないようにした。

いつも都のはずれにある屋敷を訪れるたびに月帆とその母を傷つける言葉しか吐かない父とは、いつもそうやって接して来たのだ。

「その紅い瞳。我が家に宿つた疫病神がっ……………」

吐き捨て、月帆の顎を乱暴に離した。

そのまま御簾をあげ、立ち去った。

室から去った少将は、廊下の途中で足を止めていた。

空に浮かぶ月を眺めながら、思い出すのは月帆に出会った日のことだ。

いや、正確に言えば、初めて彼女の姿を見た時だ。

それは、去年の葵祭の頃だった。

祭を楽しんだ帰宅途中、牛車の車が壊れ、難儀していたところ立ち寄ったのは寂れた屋敷だった。

家人たちは快く、屋敷の主の許しを得たからと一晩の宿まで提供してくれた。

しかし、屋敷の主について問えば、口を重くする。どうにか聞き出せたのは、主はさる高貴な方の隠し子である姫君だということだけだった。礼に赴くことも断られ、少しは気になっていた。しかし、決して屋敷の奥には行かないでくれと頭を下げられたのだ。無理に会う気はとうに失せていた。

しかし、深夜、勝手にわからない屋敷で迷ってしまったのだ。どうやらかなり奥まで来てしまったと気づいた時には遅すぎた。

庭に迫り出した縁の上に座る少女が居た。月明かりの下、碧成す黒髪が艶めいて流れ、単の背を覆っている。少女は月を見上げていた。

その両眼は怪しく、紅く輝いていた。

その一目で少将は彼女に魅了されてしまった。

素直に美しいと感じた。

少将、夜明よあけには兄が居た。

少将の地位を彼の前任者として勤めていた兄だ。

この兄は何もかもが完璧で、夜明の欲しいものは全て兄が手にしていた。

両親の期待。乳母や家人の賞賛。学問の師匠、武術の師範の関心。どれも夜明の手には無かった。

それに気づいた時から夜明は何にも期待せず、何をみても何も感ぜず、人付き合いを嫌う陰気な少年になっていた。

あの、紅い瞳の姫君だけがそんな夜明の心を久方振りに揺さぶったのだ。

彼女はこちらに気づきはしなかったが、それでも夜明は嬉しくて静かに涙を零していた。

それから夜明はかなり強引に家人を問い詰めて彼女が左大臣家の姫だと知った。

妻にしたくて、必死で宮廷での仕事に勤しんだ。出世する足がか

りを作るために必死だった。

そんな折、兄が………病死した。

兄への期待、賞賛、関心の全ては夜明に移った。思った以上に重いものだったが、それでも苦ではなかった。彼女を迎える時期が早まったのだ。

そして、左大臣に目を掛けられ、紅の姫君は夜明の婚約者となった。

そうして愛しい姫を取り戻した夜明は、少し頬を紅潮させていた。

ああ。彼女だ。あの時の姫だ。美しい瞳も、かんばせ顔も何も変わってはいない。いや、もっと美しくなっていた………。

だが気になることもあった。

なぜあんなに賊の事を気にしていたか、だ。

彼女は斬られた賊の少年が倒れふすときは体を支え、引き離せば名前を呼び続けていた。

情が移ったのかもしれないな。

そう、結論付けた。

あの傷と出血量ではおそらく助かるまい。そう思う一方で、こつこつも考えた。

姫君には助かったと言っておこう。

優しいあの少女が気に病まぬように。そうしておけば、なんの憂いも無く、彼女は、ああ、我が妻になるのだ、と。

五 冷酷の笑み（前書き）

直接的な残酷描写があります。
ご注意ください。

五 冷酷の笑み

同日、夜半。蹄の音が響き、月帆とシギを住まわせていた家の前に空蝉が馬から降り立った。

すぐさま蹴破られた木戸が目に入る。周囲の気配を探りながら近づけば、うつ伏せに倒れ付す人影に気づき、駆け寄る。どす黒いものに覆われたその人影は背中に太刀傷を負ったシギだった。

空蝉はその傍らに膝を着き、シギを抱き起こす。

「シギ、しっかりしろ。何があった」

傷に障らないようにそつと声を掛ける。

シギは呻いたあと、ややしばらくしてうつすらと目を開けた。

「頭……、やられた……」

「何があった」

「ごめん、姫様、さらわれたっばい……。俺、氣い失ってて……」

苦しそうな呼吸の合間に、シギは途切れ途切れに語った。

「す、んません……おれ、ひめさま、まもれなかつ……」

それを最後にシギは事切れた。

空蝉は無言のまま、閉じきらなかったシギの瞳を手のひらで覆って閉じてやった。

シギの体をゆっくり床に下ろすと、立ち上がる。

「そこで覗いているやつ。お前、この間から俺を探っているやつだな」

天井の梁に向かって言った。

くつくつくつ、と陰湿さを感じさせる笑い声が返ってきた。

「……恐ろしい人ですねえ。どこからわかっていたんですねえ」

「大分始めのほうからだな。ただし、お前がどのどいつかは知らねえな」

「おや。わからなかったんですか？」

「いいや。興味が無かった」

「くつくつくつ……。でも、目的はわかっていたんでしょっ？」

「ああ。月帆のことだろう？」

天井の一点を見据えたまま厳しい声で言い募る。

その視線の先には闇しか見えない。

「正解です。ですがそのぶんだと、月帆姫が左大臣家の姫君だとい

うことはご存知なさそうですね」

「どうでもいいことは気にしねえ質なんだ」
たち

「おやおや。まあ、知ったところで貴方はここで死ぬんですがね」

「俺を殺せると?」

「ええ。この間の盗みを見る限り、貴方は自分が直接殺し回る方ではありませんでしたね。つまり気配を読むことに長けてはいても、腕には自身が無いのでしょうか?」

「……やばそうな奴だと思ってあいつらには手出しを控えさせていたが、間違っていた様だな」

「何ですって?」

「お前を殺さなかったのは俺の判断が甘かったという話だ、外法使
い」

不思議そうに尋ねたこの声が梁の上の男、岐道の最後の言葉となった。

次の瞬間、天井いっぱい血飛沫が上がった。ついで、頭、胴体の順に岐道が床に落ちてきた。

六 大路の宵闇（前書き）

前の話に続いて、残酷描写があります。
ご注意ください。

六 大路の宵闇

夜明が家人けいじんに呼ばれていくと、左大臣が帰ろうとしていた。

「左大臣様！姫君をお連れにならないのですか？」

その声を掛けると、階きざしを降りかけていた左大臣がこちらに向き直った。

「すまないが、しばらく月帆を預かっては頂けないか？」

「えっ。しかし姫君はお帰りになりたいのでは？」

「……大きな声では言えぬのだが、私の屋敷にも姫の存在を知る者は多く無くてな。そのような所故、むしろ居心地が悪かろうと思うのだ」

苦りきったように眉を顰め言う左大臣に夜明は納得をした。

「……そうでしたか。わかりました。姫君は私が責任を持ってお預かり致します」

「よろしく頼みますぞ」

そういうと左大臣は足早に牛車に乗り込んで去っていった。

それを見送った夜明はその足で月帆のいる部屋へと向かった。

声を掛けて室内にはいると、御簾の奥に月帆が先ほどと寸分違わ

ぬ位置に座していた。

「月帆姫、……父君より貴女のことを頼まれました。もうしばし我が家にご滞在下さい。どうぞ、今宵はゆっくりとお休みを……」

そう言った夜明が室を出て行ってもなお、月帆は表情を動かさず、その瞳も伏せられたまま夜明に向けられることは無かった。

一方、自宅への帰路を行く左大臣一行は人気のない朱雀大路を進んでいた。

牛車の中では左大臣が手に持った扇を開閉する音が響いていた。

ぱちんっ、ぱちんっ

「全く忌々しい鬼姫め。あの物好きな少将がいなくばただの厄介者に過ぎぬというに……」

ぱちんっ、ぱちんっ

かたっ

扇を開閉する音の中に、牛車の上方からの音が混じった。

「おお、岐道か。空蝉の始末はついたか？万が一にも仕損じてはおらんだろうな」

そこまで言って、何の反応も見せない岐道に左大臣は不審を抱いた。

「岐道、返事をせんか！」

声を荒げると、返答のように反応が返ってきた。

ばさっ……………ごっつ……………

一刀の元に牛車の御簾が斜めに切り落とされた。

その後牛車の中に投げ込まれ、てん、てん、と転がり、自分の膝に当たって動きを止めた物を、左大臣は薄暗い中よく見ようと思い、半ば無意識に手に取った。

ずしりと思いそれは、岐道の首だった。

「ぎゃあああああああ」

すぐさまそれを外に放ると、首は再び、今度はもつと勢いをつけててんと転がっていき、佇む男の足元にぶつかって止まった。

左大臣の目線が男の体を足元から辿って行く。放免のような着崩した衣装の下にはしなやかな肉体が見て取れる。その顔はまだ若い男のそれで、線が細く優美な顔立ちだが、その瞳には獣のような獐猛さが見て取れた。

男は体の脇に下ろしていた刀を持ち上げ、左大臣に切っ先を向けて言った。

「この先、俺と月帆のことには手を出すな。この男のように首だけにはなりたくないだろう」

口の端を吊り上げて笑ったように見えた。

「お、お前、空蝉か！」

上擦った声であられもなく左大臣は叫んだ。

「俺が恐ろしいか？ だったらそのまま帰れ。金も権力も、命あつてこそ…… だろう？」

左大臣は今にも噛み殺されるような心地がして、必死で首を縦に振った。

既に男が消えている事にも気づかずに。

七 邂逅の宵闇

月帆は用意された室を出て裏庭に面した簀の子に座り月を眺めていた。

半分しかその姿を見せない月をじっと眺めていた。

「そんな風に、貴女は以前も月を眺めていましたね」

後ろからそっと近づいていた夜明ヨシトキが静かに言った。

月帆はゆっくりと彼の方を向いた。普通の姫君とは違い、男の視線に臆することなく夜明を見つめる。その瞳に静かな感情が宿っていることに彼は気付いた。

「ああ、貴女はずっと正気だったのですね。なぜ正気を失った振りなど?」

「……………」

月帆は思案して小さく顔を歪めた。

少将は月帆の返事をただ待った。

ややもして、ようやく彼女は戸惑い気味に口を開いた。

「父様から、解放されたかったのかもしれませんが」

「左大臣様から?何故です」

また月帆は黙り込んだ。今度は少将が幾ら待っても返事は返ってこない。

「……姫君は、私の名前をご存知ですか？」

「夜明さま」

「ええ、そうです。そして、貴女は月帆様」

確かめるように言う夜明が何を言いたいのか月帆にはわからなかった。

「つまり、ですね。私は、その……夜の空に浮かぶ月に、なって頂きたいのです」

言葉に迷うように切れ切れに夜明は言う。謎かけのような台詞に月帆は首を傾げる。

月帆の母は言の葉を操り美しい歌を詠んでいたが、月帆にその才は受け継がれず、彼女は貴族の言葉遊びに詳しくなかった。

「どづいつた意味でしょう？」

それ故に、早々に考えるのを放棄して夜明に尋ねた。

「つまり、その……私の妻になって頂きたいのです」

「……………」

月帆の無言は長かった。夜明は歌を詠み文にしたた認めることは容易くても、それを口に乘せるとなるとかなりの勇気を必要とすることを今始めて知った。同時に、後悔もしていた。愚直な自分らしく、素直に一言で結婚を申し込めば良かったと。

「あの、……………」

夜明が口を開いたその時、その顔のすぐ脇を何かがすり抜けた。

しゅんっ

空を切る音の後、かんっと音を立ててすぐ後ろの柱に突き刺さったのは弓矢だった。

矢の放たれた方向を素早く振り向くが、誰もいない。ただ、梢の音が聞こえるばかりだ。

「月帆姫、お怪我はありませんか？」

月帆を案じて振り向くと、簀の子の端、匂欄くわんに腰掛ける男がいた。どう見ても放免のような、ならず者の姿だ。

「っ空蝉！」

月帆が鋭く叫んだ。

それに答えるように男は首をくい、と小さくあげた。そうしてから、腕を組んだまま指先を動かす。まるで、そちらに居る何者かに指示を出すかのように。

「空蝉……？この男が？」

月明かりも届かないというのに、夜明はその姿に見覚えがある気がした。

男は勾欄から腰を上げ、こちらに進んでくる。その物腰は柔らかく優雅ささえ漂わせる。

近づいてくる男を警戒して夜明は腰の刀に手を掛けた。

やがて男の全貌が明らかになる。差し込む月明かりが男の顔を暴く。

夜明は目を見開き、叫んだ。

「……………」

八 咲花の宵闇

月明かりが空蝉の顔を暴く。

夜明は目を見開き、叫んだ。

「……………兄上!!」

男は一年前に失踪した兄だった。世間体を保つ為、夜明と両親が必死で病死したことにした男だった。

口の端をあげて笑う、あの笑い方をする。

「よお、元気そうだな、夜明。俺の後に少将になったか」

夜明はかっと目を見開き、鞘から刀を抜き放った。

「私の名を気安く呼ぶな。地位を捨て、家を捨てたお前などわが兄ではないわ!」

その言葉に空蝉は、いかにも「しょうがない奴だな」といった笑みを浮かべた。当然、それが更に弟を激昂させるとわかっていてやっている。

「ふっ、手厳しいな」

「何をしに来た!」

手にした刀を空蝉に突きつける。

「もちろん。奪われた姫君を取り戻しに、だ」

「奪われただと？……そも、姫君はお前に攫われていたのだぞ？」

「だが、ここにいるより余程楽しそうだったぞ」

面白がるようにまた笑みの種類を変える。

それから、ただただ二人の遣り取りを見上げるばかりの月帆を見下ろして空蝉は言う。

「あまり驚かないんだな」

「ええ。貴方が貴族だということはわかっていたから……」

「鋭いな」

いつもするあの笑顔で笑う。

「ところで、夜の空に浮かぶ月よりも日中ひなかに咲く月になる気はないか？」

今度は真面目くさった顔で謎めいた言葉を言いだした。

一人意味のわかったららしい夜明が顔色を変える。

「何を馬鹿なことをっ」

そちらに向き直った空蝉は言う。

「馬鹿なことかどうか決めるのは月帆だ」

「……………昼の月など、存在せぬも同然ではないか」

吐き捨てるように夜明は言った。

その言葉に月帆は心が抉られる様に感じた。

父が母と月帆の元を訪れるのはいつも夜。昼間の二人はひっそりと息を潜めて生きていた。その物悲しい思い出が胸にこみ上げた。

「昼だろうと、夜だろうと、月はいつでも天にいる。気付くか、気付かないかは関係なくな。そうだろう、月帆」

深紅の瞳に涙が溢れた。

凍ったようだった心に暖かいものが流れ込んだ。

月帆が欲しかったのは、彼女の容貌だけで求められる想いではなく、真紅の瞳も、月帆の心も、その全てを認めてくれる想いだった。そんな想いをくれる存在だった。

空蝉がそうだったのだ。

真っ直ぐに、月帆は手を伸ばした。

それを見た夜明は硬直した。空蝉に向けていた刀がゆっくりと下ろされる。

月帆を片腕で抱き上げた男は、固まったままの弟の脇を通り抜け、庭へと降り、悠々と立ち去った。

四匹の聖獣が守護する京の都の夜、駆けるように行く影が一つ。

途中、影は一つから二つに分かれた。

抱き上げていた月帆を降ろした男は、その手を懐に入れた。

差し出したその手には早咲きの薔薇そらびの花。白く、小さな花弁は桜に少し似ていた。

「約束は守る。俺の名は……………」

今は空蝉と呼ばれるその男は、月帆の耳元で己の真名まなを告げた。

日中に吹く風の名だった。

京の都には鬼がおりまする

人に仇あだなす恐ろしい鬼が……………

けれどその鬼が持つのは、穢れ無き真白き魂やもしれません

八 咲花の宵闇（後書き）

読んで頂き有難うございました。

今回で『鬼姫奇談』は最終話となります。

ただ、番外編を作成中です。

番外編というか、その後の話というか……。

『鬼姫奇談』として続けるか、別の話として投稿するかはまだ悩み中です。

はっきりしたら報告& a m p ; 投稿させて頂きます。

番外編 優しいむらさき(前書き)

番外編の一話目になります。

番外編 優しいむらさき

平安京は、碁盤の目状に整然と作られている。

しかし一步都から出れば、荒れた土地が広がっていた。

そんな土地の中でも小倉山のふもとに広がる化野あたしのという土地は纏う雰囲気が違った。

その名の意味するところの通り、そここに土饅頭と呼ばれる、掘って埋めただけの墓があった。

点在する土饅頭の中でも、真新しいそのの前に一組の男女が居た。

一人は放免のように衣装を着崩した男。腰には刀を履き、どこか獰猛な獣のような雰囲気を醸し出している。

その傍らに佇むのは、黄檗色きはだの着物に身を包んだ少女だ。長い黒髪を腰の辺りで一つに纏めている。伏し目がちなその瞳の色は、鮮やかな深紅だった。

盗賊団『陽炎』の頭・空蝉と左大臣の姫だった月帆だ。

月帆は膝を着き、手に持っていた紫の花を目の前の土饅頭に供える。

「あまり、墓前に供える花ではないそうなんだけれど……」

少し申し訳なさそうに言う。

「どうせ、この粗忽者には花なんかどれも同じに見える」

腕を組んだままの空蝉が言った。その声音はけして冷たいものは無かった。

それに、くすりと月帆は笑みを零した。

「不思議な子でした。どうして、私の目を怖がらなかったのかしら。それは、陽炎の皆さんに言えることだけれど」

「夜の闇に蠢く盗賊団が鬼だ妖だと騒ぐわけではない。だが、シギは少し事情が違うな」

月帆は首を傾げて空蝉を見上げる。

「こいつの母親は月帆と同じ赤い目を持っていた」

その言葉に彼女は目を見張る。

それを見下ろした空蝉が目を意味有り気に目を細める。

「だが、お前程の赤ではなかったがな。それに、片目が潰されていた。誰にやられたかは決して口にしない女だった」

シギの母親はシギを連れて、盗賊団の元に流れてきたらしい。賄いを作る飯女として半年程働いて、病を得て死んだ。残されたシギはそのまま盗賊団に残ったということだ。

「こいつは」

そう言って土饅頭に視線を走らせる。

「あの女に似た、ただの世話好きだ」

やはりその口調には嘲りのような負の感情は見当たらない。

月帆は再び顔を前に向けるとそっと手を合わせた。ただ、二人が安らかであればいいと思った。

自分のせいだと思うには、空蝉の言葉がそれを邪魔をする。

だから、ただ願い、祈った。

「行くぞ」

傾き始めた陽光が紅の色を作りだす中、空蝉が言って、月帆に手を差し出す。

そっと重ねた手の熱さが愛しかった。

番外編 優しいむらさき（後書き）

読んで頂き有難うございました。

番外編、まず一つ目です。

彼の死は悲しいだけのものにしたくないと思います。

番外編 羅生門くらじょうのもの(前書き)

「鬼姫奇談」番外編の二話目になります。

番外編 羅生門くらじょうのもん

らじょうのもんには二匹の鬼がある

右目に深紅左目に漆黒しじくの女鬼おんなおに、左目に深紅右目に漆黒しじくの男鬼おとこおに

京のみやこには二対のこわいものがある

民おそるはかみなる仕業しわざ

卿おそるは闇夜のかげろう

らじょうのもんの二匹の鬼は

民のおそるる仕業に怒り

卿おそるるものどもひきいて紅きほのおをみやこに放つ

「ばあさん、今日も景気が良さそうだな」

まだ若い少年の声が、日も落ちて久しい闇に響く。

「あんまりお客さん、連れてこないでよね。多すぎても困っちゃうんだから」

今度は少女の声が拗ねた様に言う。

場所は都の外れの廃寺だ。土壁は崩れ、瓦屋根は半分が落ちてしまっている。雑草がそこかしこに生え、細い木までが我が物顔で建

物の間に枝を伸ばしている。

声はどこからとも無く聞こえ、響くとも思えない廃墟に、うわんと反響する。

大きな琵琶びわを抱えて唄っていた老女は、小首を傾げて辺りを見回した。

「お客は、無事にあなたたちのところへ来たのかい？」

問いかける口と裏腹に、その瞳は硬く閉ざされて瞬くことはない。

びいん、と琵琶が啼く。

「五人は死んで、十人は諦あきらめた」

「九人は強欲を出して、二人は捕まった」

「そして、最後の一人が望みを叶えた」

ほう、ほう、と夜鳴き鳥の声が遠ざかる。

「なんとまあ、それだけ行って、たったの一人かい」

皺だらけの手が、膝に置いていた撥はちを握む。

びいい……………ん、と弦を弾く。

皺だらけの喉が、くいと上がる。

一人が叶えたその望み、

果たしてそれはまことのうつつか

はたまたみやこの見たる胡蝶のゆめか

番外編 羅生門くらじょうのもん（後書き）

読んで頂き有難う御座いました。

幾らか掛詞があるのですが、上手く伝わるといいなと思います。
まあ、和歌の才能は無いので微妙ですが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8995o/>

鬼姫奇談

2011年4月10日18時05分発行